

幼馴染は俺のいいなり

柵@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小柄で美人な幼馴染は何でも言うことを聞く。

例えパシリにされようが、胸を揉まれようが、キスされようが、逆らうことができない。

そんな日常の物語。

目次

幼馴染は内気	1
幼馴染は巨乳	5
幼馴染はパシリ	8
幼馴染はポニテが似合う	11
幼馴染は料理上手	15
幼馴染はモテる	19
幼馴染はイジメられっ子	24
幼馴染と卒業	28
幼馴染が好き	32
幼馴染が大好き	37

幼馴染は内気

俺には幼馴染がいる。

家もすぐ隣で、小学生からの付き合いだ。

高校生になった今も、毎日のようにそいつの家に訪れている。

学校から帰ると、鞆を置いてからすぐに隣の家に訪れる。合いカギも持っているので、いつでも出入り可能だ。

幼馴染の家に入ると、目的の部屋へと一直線に向かう。

部屋の前に到着するとすぐにドアを開いた。

「おーっす。今きたぞー」

「……………もう……………いきなり……………入ってこないでよ……………」

「別にいいだろー。今さら細けえこと気にすんなっての」

困った顔で俺を見上げる少女。

この少女こそ、俺の幼馴染である。

名前は陽^{ひより}抛^{ゆきは} 雪羽^{ゆきは}という。

髪は腰に届きそうなほど長く、大人しそうな印象を受ける子だ。

胸も意外と大きいし、スタイルはいいほうだと思う。

俺が言うのも何だが、学校の中でもトップクラスの美人に入ると思う。

雪羽は未だに制服姿だった。

俺は家に帰ってからすぐに来たからな。着替える時間が無かったんだらう。

部屋に入ってからすぐに本棚へと向かった。

「んじゃさっそく昨日の続き読むか。えーつと……………」

本棚にある漫画を漁って目的の本を探し出す。

「あったあった。続きが気になってたんだよなー」

「……………」

本を手にしてから床にゴロンと居座った。

「……………ほう。こーいう展開できたか……………」

「……………」

「ほうほう……………」

「……………」

しばらく本に没頭していると、雪羽から話しかけてきた。

「ね、ねえ……リョウくん……」

「ん？ なんだよ？」

雪羽は俺のことを『リョウくん』と呼ぶ。

俺の名前が響ひびき 亮介りょうすけだからだろう。

小学生からそう呼ばれていた。

「あのね……私……まだ制服のままなんだけど……」

「それがどうした？ さっさと着替えろよ」

「だからね……あの……」

「今は忙しいんだ。後にしてくれ」

「うう……」

困った表情で俺を見下ろす雪羽。こいつはいつもそうだ。

雪羽は気が弱く、まず怒るようなことはしない。

そんな性格だからか、常に眉を「ハの字」にしているようなやつだ。

「だ、だからね……その……」

「んだよ。ハッキリ言えよ」

「そ、そろそろ着替えたいんだけど……」

「だったらさっさと着替えればいいだろうが」

「で、でも……」

こいつが言いたいことは分かりきっている。

だがあえて気づいていないフリをする。

「あ、あのね……リョウくんが……いると……その……」

「何が言いたいんだよ？」

「だ、だから……このままだと……着替えられないというか……」

「は？ 何言ってるんだお前。一人で着替えることすらできないのか？」

「ち、違うよお！ そうじゃなくて……リョウくんがいると……やりにくいというか……」

「ふーん」

予想通りだな。

俺がいると着替えられないと言いたいんだろう。

だがそんなこと知ったことか。

「す、少しの間でいいから……部屋の外に居てほしいというか……」

「何でだよ。今いいところなんだよ。邪魔すんな」

「うう……」

雪羽から悲しそうなタメ息が聞こえた。

いつものことだからか、諦めたようだ。

「じゃ、じゃあ……廊下で着替えるね……」

「……は？ 何でだよ」

「えっ……」

やっぱりそうきたか。

だが無意味だ。

「お前いつも廊下で着替えてるのか？」

「そ、そんなことしないよう……」

「だったらここでやればいいだろうが。馬鹿かお前は」

「で、でもお……リョウくんが居るから……」

「あん？ 俺がなんだよ？ 別にいいだろ。今ここで着替えろよ」

「え、ええ……」

さらに困った表情になっていく雪羽。

けどそんな顔をして俺の気は変わることは無い。

「それとも何か？ 俺が邪魔だと言いたいのか？」

「だ、だってえ……このままだと……」

「別に着替えるところを見たりしねーっての。どんだけ付き合い長いと思ってるんだ」

「そ、そうだけど……」

「まさかと思うが、俺の言うことが聞けないってのか？」

「……ッ」

全く。困ったやつだ。

敵わないって自覚してるはずなのに、いつも無駄な抵抗をしようとする。

「だったらここで着替える。いいな？」

「……わ、分かったよう」

「んじや続き読むから。くだらんことで呼んだりするなよ？」

「う、うん……」

そして再び漫画に集中することにした。

しばらくすると、後ろから服が擦れるような音が聞こえてきた。

雪羽が着替えはじめたらしい。

背後から黙々と着替える音が聞こえてくる。今の雪羽は下着姿になっっていることだろう。

だが別に後ろに振り向いたりはしない。

この程度なら動揺することもないからだ。

これが俺たちの関係だ。

雪羽が俺に逆らうことは無い。

小学生の頃から変わらない。

なぜなら——幼馴染は俺のいいなりだからだ。

幼馴染は巨乳

学校から帰るとすぐに着替え、隣の幼馴染の家へと向かった。部屋に入ると、いつも通り眉を「ハの字」にした雪羽が座っていた。

「おーっす。今日はもう着替えてたんだな」

「だ、だってえ……昨日みたいなことになりたくないし……」

「全く。最初からそうしとけばよかつたんだよ。後からグチグチ言いやがって」

「……………」

何か言いたそうなにしていたが、俺が睨むと顔を背けてしまった。

まあ、文句言ってきたなら黙らせるんだけどな。雪羽もそんな展開が読めたから黙ったままなんだろう。

「さーて。今日は何読もうかなー……………」

本棚からテキトーに漫画を選び、いつものように床に座った。

雪羽もベッドの上で静かに本を読んでいる。あれは何かの小説だろう。

興味ないので自分の漫画に集中することにした。

しばらく漫画を読み進めると、あるページで手が止まる。

登場人物の女の子が胸を揉まれるという展開だった。

「……………なあ。面白いや雪羽は何カップになったんだ？」

「えっ……………え？ な、何の話？」

「おっぱいのサイズに決まってるだろ」

「……………ッ！」

雪羽は見た目は小柄な癖に、意外と胸が大きい。学校のクラスの中では一番大きいかもしれない。

「ほら。教えろよ」

「……………いい、言わないと……………ダメ……………？」

「あ？ 俺に隠し事するのか？」

「そ、そんなつもりじゃ……………」

「だったら早く教えろよ」

「……………」

ふむ。ダンマリか。

まあ。予想はしてたけどな。
なら強硬手段だ。

「そつちがその気なら……自分の手で確かめるだけだ」
「……………!?!」

雪羽の元へと移動し、背後に回った。

「どれどれ……………」

「ひゃんっ」

背後から両手で胸を掴む。

そのまま手を動かして揉んでいく。

「ほうほう。いい感触じゃねーか」

「や、やめてよう……………」

「っーか本当大きくなったよな。どんだけ成長したんだよ」

「あうう……………」

小学生の頃はペツタンコだったのにな。

だから俺が何とかしてやろうと思っただ。

あれから毎日のように雪羽の胸を揉み続けた。誰かから胸は揉めば大きくなると聞いたからだ。

その効果があつたのか、中学に入ってから急に成長し始めた。もちろん、その間にも毎日揉み続けていた。

高校に入ってからには目に見えて大きくなった。

そして今は両手からはみ出そうなぐらい成長した。

雪羽の胸は俺が育てたといつても過言じゃない。

「んーと。このサイズなら……Dか? いやEはいつてるか?」

「い、言うから……………離してよう……………」

「全く。最初から言えばいいだろうに」

俺が離れると、雪羽は少し顔を赤くしながらボソボソと喋り始めた。

「その……………ふだよ」

「あん? 聞こえねーぞ」

「だからね……………今は……………Fみたいなの……………」
「ほー」

なんと。そこまで成長したのか。
育てた甲斐があつたというもんだ。

「すげえじゃん。ここまで大きい女子つて雪羽ぐらいじゃね？」

「よ、よくないよう……………」

「なんでだよ。嬉しくないのかよ？」

「だ、だってえ……………男の人は……………いつも胸ばかり見るし……………」

「そりやそうだ。男ならみんな見るだろ」

「ブラだって……………買い替えなきゃならないし……………」

「下着なんていつかは寿命がくるんだ。それが早まったと思えばいいだろ。いい加減諦めろ」

「うう……………」

女の人は男以上に胸の大きさを気にするって聞いたことがあるのにな。

せつかく人が羨むサイズなつたんだ。もつと喜ばばいいのにな。

まあいい。俺が得するんだからこれでいいんだ。

また今度も大きさを測ることにしよう。

どうせこいつは断ることは無いしな。

幼馴染は俺のいいなりなんだからな。

幼馴染はパシリ

いつも通り、合い鍵を使って幼馴染の家へと入る。
今日はとある物を持参している。

「入るぞー」

「……………も、もう……………だから……………いきなり部屋に入ってこないでよう……………」

「いちいちうるせーな。何年の付き合いだと思ってるんだ。いい加減なれろ」

「うう……………」

さてと。準備しなくては。

部屋に置いてあったPS4を引き寄せ、買ったばかりのソフトを入れて機動した。

コントローラー握ってロード画面を眺めていると、雪羽が話しかけてきた。

「それ……………どうしたの?」

「ん? このソフトか? 実はさっき買ってきたんだよ。面白そうだったからな」

「ふ、ふーん……………」

その後は特に会話も無く、ゲームを進めていった。

ふう。そろそろのどが渴いてきたな。

ぶっ続けでやってきたからな。何か喉を潤すものが欲しい。

「なあ雪羽」

「な、なに?」

「コーラ持ってきてくれよ。喉が渴いたからさ」

「もう……………」

雪羽は読んでいた小説を閉じ、渋々と立ち上がって部屋から出て行った。

少し待っていると、コーラを注いだコップを持って戻ってきた。

「はい。こぼさないでね……………」

「んなことするかっての。アホなことまで心配するなよ」

「で、でもお……リヨウくんはゲームに夢中だし……」

「大丈夫だったの」

受け取ったコーラを一気に飲み干し、すぐにコップを空にする。

「ほら。これでいいだろ？」

「う、うん……」

「んじやお代わり持つて来いよな」

「……………」

何か言いたそうにしていたが、すぐに空になったコップを持つて出て行った。

なんだかんだで用意がいいやつだ。

俺がコーラを飲むと分かっていたから、予め買っていたんだろう。本当に優秀なやつだ。

しばらくゲームを進めていると、道中のボスモンスターに敗北してしまった。

何回かトライしてみたが、やっぱり勝てなかった。どうやらレベル不足のようだ。

ここまでレベリングもしてなかったし、最短で進めてきたからな。さすがにこのままでは先に進むことが出来ない。

かといってレベリングも面倒なんだよな。

ふーむ……あつ。そうだ。

「おい雪羽」

「な、なに？」

「お前が代わりにレベリングしてくんね？ 正直ダルいんだよな」

「え、ええ……」

そう。雪羽にレベリングをさせればいいんだ。

こいつはそういう時に役に立つからな。

「わ、私はやったことないんだけど……」

「ただのRPGなんだし、複雑な操作は必要ねーよ。お前でも出来るって」

「そ、そうかな……?」

「いいから。早くやれよ。先に進めないだろ」

「わ、分かったよう……」

コントローラーを渡すと、雪羽が慣れない手つきで動かし始めた。けどすぐ慣れるだろう。こいつは意外と器用だしな。さてと。

俺は漫画でも読んで待っているか。

幼馴染はポニテが似合う

幼馴染の髪は綺麗だ。

腰まで届きそうなほど長く、サラサラで手触りがいい。

そんな雪羽の髪を弄り回している。

「ほんとサラサラだよな。何度触っても飽きねーや」

「そ、そうかな……？」

雪羽の背後に座り、髪を自由に触りまくっている。

「そ、それよりも……いきなりどうしたの？　なんで突然、髪を触りた
いなんて言い出したの？」

「暇だから」

「……………」

呆れたようなタメ息が聞こえた。

これもいつものことだからか、文句を言う気も失せたのだろう。

「つーかいつ見てもサラサラだよな。手入れも大変そうだな」

「むう……他人事だと思って……」

「なんだよ。俺が何かしたのか？」

「だって……ここまで長くしろって言ったのは……リョウくんじゃな
い」

「そうなのだ。」

雪羽の髪がここまで長いのは、俺が命令したからだ。

理由は簡単。俺の好みだから。

「もう……大変なんだよ……？」

「へえー」

「だからね……少しでいいから……切りたいなーって思うんだけど
……………」

「ダメだ」

「うう……やっぱり……」

そんなの許可するはずがないだろうに。

無駄に抵抗しやがって。

「んーそうだなー。1センチぐらいなら切っていいぞ」

「あんまり変わんないよう……」

「我がままいうな。これくらい別にいいだろ」

「よくないよう……」

これ以上は長くならないように調整しているつもりだ。

あんまり長すぎると支障が出てきそうだな。

近づいてにおいを嗅いでみる。

するとフワリとシャンプーの香りが漂ってきた。

しかし、本当に手入れが行き届いてるな。何度触っても飽きない。

「あっそうだ。ポニテにしろみるよ」

「ぽ、ぽにて？ ポニーテールのこと？」

「そうそう。やってみろよ。似合うと思うぞ」

「そ、そうかな……？ じゃあちよつと待っててね」

そういつて髪留めを取り出し、髪を後ろに束ね始めた。

あとは結んで髪留めを付け、細かく調整すれば完成だ。

「ど、どうかな？」

「うん。いいじゃん。似合ってるぞ」

「そ、そう？ えへへ……」

やはり髪が長い人だとポニテがよく似合う。

雪羽が美人だからなおさらだ。

「じゃ、じゃあさ。明日は……この髪型で学校いってみようかな？」

「んん……」

「あっそうだ。前に買ったリボンがあるから、それを付けてみようか

と——」

「ダメだ」

「……だ、だめ？」

「やっぱり普段通りでいい。そっちのほうが慣れてるし」

「えー……」

なんとなく、ポニテ姿を他人に見せたくなくなった。

こういうのは一人占めしたい。

「とうかりボンって何だ？ そんなの買ったのか？」

「う、うん。前にね、お店で可愛いのを見つけたの。だからね、安かつ

たからつい買ったちゃった……」

「ほー。どんなのだ？ 見せてくれよ」

「いいよ。ちよつと待っててね」

そういつて引き出しからリボンを取り出した。

「ほら。これなの」

「へー」

見せてきたのは花形のリボンだった。

ピンクに近い色で、手の平サイズで小さめだ。

「なかなかいいじゃん。今付けてみるよ」

「あ、うん。付けてみるね」

ポニテのままだった雪羽は、束ねた髪の付け根にリボンをつけ始めた。

まだ慣れてないのか、位置の調整に手間取っているようだった。

「こ、こうかな……？」

「……………」

「ど、どう？ 似合う……かな？」

「……………」

「えつと……リョウくん？」

予想以上に似合っている。

まさかここまで変わるとは思わなかった。

リボンがそこまで大きくないので目立たないと思ってたが、雪羽が小柄なせいで丁度いいサイズに感じる。

長年の付き合いだけど、ここまで可愛いと思ったのは初めてかもしれない。

「あのー……リョウくん？」

「……………」

「ど、どうして何も言わないのよう……」

「……それ禁止な」

「えっ？」

「そのリボン。付けるの禁止な」

「え、えええ……」

こういう姿を見られるのは俺だけでいい。今は誰にも見せたくない。

そんな独占欲にかられてしまった。

「今後、許可なくリボン付けるのは禁止。いいな？」

「な、なんでえ……」

「いいな？」

「わ、分かったよう……うう……」

シヨンボリする雪羽だったが、俺の気持ちが変わることは無かった。

幼馴染は料理上手

雪羽は家に居るときは、基本的に一人だ。

両親は離婚していて母親と一緒に暮らしているが、日中は仕事で居ないとのこと。いわゆる母子家庭ってやつだ。

そんな状況だからか、ほとんど一人でいる。

俺が何度も雪羽の家に行けるのはこういうった事情を知っているからだ。

小学校からの付き合いだからか、雪羽の母親からも信頼が厚い。昔から雪羽のことをよろしくと言われてるからな。

合いカギを持つてるのも母親から貰ったからだ。

つまり、俺が家を自由に出入りできるのは親の公認ってわけだ。

雪羽の母親は仕事で忙しいらしく、家に帰ってこない日もよくある。

そんな日はチャンスだ。

何故なら――

「雪羽ー。今日のメシは何だ？」

「えっとね。お魚の煮つけでもやろうと思うの。安かったからいっぱい買ってきちゃった……」

「おー。いいね。楽しみにしとくわ」

「うん。美味しくなるようにがんばるね」

こういう日は雪羽の家に泊まれるからだ。

今日はこのまま泊まって、明日は一緒に家を出て学校いく予定だ。もはや何度もやってるせいかな、雪羽もすんなり受け入れてくれる。そんなこんなで日も暮れて、晩飯の時間となった。

「リョウくん。ご飯出来たよー」

「おう。今行くわ」

読んでいた漫画を置き、居間のテーブルへと移動した。椅子に座ると、次々と料理が置かれていく。

「なかなか美味そうじゃなか。卵焼きもあるな」

「リョウくんは卵焼き好きでしょ？ 少し甘くしたやつ」

「おう。大好物だ。さすが雪羽だな」

「ふふん。リョウくんのことなら色々知ってるんだからね」

「んじゃ。いただきまーす」

まずは魚の煮つけからだ。

一口食べて味を噛みしめる。

「……おお。うめえ。これイケるぞ」

「ぞ、そお?」

「ああ。めっちゃ美味しい。いくらでも食えるな」

「ほ、本当? よかったあ。えへへ」

雪羽はずっと自分で家事をしているせいか、料理の腕はかなり上達している。正直言って、下手な店に行くよりも美味しい。

俺が泊まりに来るのも、美味しい料理が目当てだったりする。

しかも朝食まで作ってくれるんだから、いたれりつくせりだ。

「お魚はまだあるから、お代わりするなら言ってね」

「おう。サンキューな」

長い付き合いだけあって、俺の舌に合わせて味付けをしてくれている。

こういう時は本当にありがたい。

食事が終わった後、雪羽は後片付けをし始めた。その間に、俺は風呂入ることになった。

この流れもいつも通りだ。

風呂から上がって部屋で漫画を読んでいると、パジャマ姿の雪羽がドアを開けて入ってきた。

「ふう。いいお湯だった〜」

雪羽が幸せそうにな顔をしながらベッドへと向かう。

風呂上りなせいか、妙に色っぽく感じる。

「……リョウくん? どうかしたの?」

「い、いや。別に何も……」

「?」

つい顔を背けてしまう。

雪羽はベッドの上に座り、ドライヤーを取り出した。
いつもああやって髪を乾かしている。

「……なあ」

「なあに？」

「俺がやってやろうか？」

「え？ な、何が？」

「髪乾かすの」

「え、ええ？ リョウくんが？ ど、どうしたの急に……」

「いいから。それ貸せて。やってやるから」

「う、うん……」

ドライヤーを受け取ると、雪羽の後ろに座った。

スイッチを入れて髪を乾かし始める。

まだ洗ったばかりなせいか、フワリとシャンプーの香りがする。

「今日のリョウくん……優しいね」

「何だそりゃ。いつもは優しくないってか？」

「そ、そうじゃないけど……いつもと違うというか……変なこととしてこないし……」

「いちいちうるせー奴だな。じゃあもつと好き放題していいってか？」

「それはいつもやってることなんじゃ……」

「こいつも生意気なこと言いやがるな。」

「そっちがその気なら……」

「……よーし。んなこと言うなら、明日はノーパンで登校してもらおうか」

「え、ええええええ!? な、なんでえ……?」

「お前が生意気なこと言うからだろ。口は災いの元だ。学校に到着するまでパンツ履くの禁止な」

「うう……やっぱレイジワルだあ……」

全く。こいつも学ばないな。

変なことを口走るからこうなるんだ。それぐらい分かっているはずなのにな。

まあいい。明日は存分に楽しむとしよう。

幼馴染はモテる

翌日。

昨日言った通り、雪羽はノーパンのまま学校へ行くことになった。学校に辿り着くと、雪羽はすぐにトイレへと駆け込んだ。パンツを履きにいったんだろう。

ずっと下半身を気にする姿はなかなか楽しめた。またいつかやろうと思う。

ちなみにだが、学校では雪羽とは普通に接している。

家にいるときみたい、いいなりにするようなことはしていない。

ああいうのは二人つきりなっただけだ。

周囲からも『普通の幼馴染』として認識されている。そういう関係だと思われるように隠しているからな。

だがそれはそれで、からかってくる奴もいる。

「はあー。響は羨ましいよなー。美人な幼馴染がいてよー」

友人がそんなこと言いながら俺に話しかけてくるのだ。

「それがどうしたんだよ」

「だってよ。響は陽抛ひよりの隣の家に住んでいるんだろ？ ってことは、すごく親密な関係になれるじゃんか」

「あいつとはそんな関係じゃないっての」

「本当かよ？ オレならあんな可愛い子は放っておかないけどな」

とまあ。何度もこんな感じだからかわれるのだ。

だから学校では、雪羽とはあまり絡まない。あくまで日常会話程度に済ませている。

「大体、家が隣だからって、親密なれるとは限らんだろうが」

「そうかもしれないけどよー。もったいなくないか？ あんな美人なら男が放っておかないと思うぞ」

確かにこいつの言うとおりだ。

男子の間では、雪羽はかなり人気があるほうだ。

小柄で美人、スタイルもよく巨乳、綺麗なロングヘア。人気が出ないわけがない。

ま、俺がそうなるように躰けたんだけどな。

「お、おい響。竹中が陽抛と何か話しているぞ」

「えっ?」

竹中というのは、クラスで一番のイケメン男子の名前だ。

知る限りでは性格もよく、成績も常に上位。運動神経も人並み以上。まさに女子にとっては憧れの存在だろう。

そんな人が雪羽と何か話している。

「何してんだあいつら」

「もしかして……告白するつもりなんじゃね?」

「……は?」

竹中が……雪羽に告白?

そんな馬鹿な……

「な、何言ってるんだ。いくらなんでもありえないだろ……」

「そうでもなくね? だって陽抛を狙う男は多いと思うぞ?」

「そ、そうかもしれないけど……」

雪羽と何を話しているのか気になる。

耳を傾けてみるが、少し遠くて聞き取りにくい。

「——だから——放課後待ってるよ」

「——」

どうやら放課後に待ち合わせするらしい。

だけど一体何のために?

まさか……本当に告白するつもりなのか……?

……………

気になる。

すごく気になる。

その後は授業に集中できず、悶々としていた。

放課後。

俺は雪羽の後をコツソリとついていくことにした。

見つからないように注意しつつ後を追っていると、校舎の裏側までやってきた。ここはあまり人がこない場所だ。

こんな場所に誘うなんて……やはり……

「やあ。来てくれたんだね。陽埴さん」

竹中の声だ。

既に到着していたらしい。

「う、うん。それで……伝えたいことって……なに？」

「あーそれなんだけどね」

「……？」

「なんというか……その……」

「……」

「えーと……」

竹中の声が小さくなっていく。

「……いや。率直に言おう。陽埴さん」

「？」

「君のことが好きだ。僕と付き合ってくれないかい？」

「――！」

おいおい……

マジで告白だったのかよ……

「最初は特別な感情を抱くことはなかったさ。けど気付くと、君のことを目で追っていたんだ」

「い、いつから……？」

「いつからかな。時より見せる切ない感じの表情。それが気になって意識し始めたのかもしれない。気づいた時には、君のことを思うにようなっていた」

「そう……なんだ……」

……

「常に哀愁漂う表情をしているもんだから気になって仕方なかった。そんな姿を見ていたら、僕が守ってあげたいと思うようになっていた。だから勇気を出して気持ちを伝えたかったんだ」

「わ、私は……」

「もう一度言うよ。陽埴さん。君のことが好きです。僕と付きあつて下さい」

「……………」

10秒ほど経っただろうか。

雪羽の声が聞こえてきた。

「ごめんなさい……………」

「……………」そうか。フラれちゃったか」

竹中の声はどこか吹っ切れたような感じだった。

「いや。ごめんよ。こうなることは分かっていたけど、伝えずにはいられなかったんだ」

「えつと……………」私は……………」

「うん。要件はこれだけなんだ。じゃあ僕は帰ることにするよ。じゃあね」

「あ、うん……………」

俺はすぐさまその場から立ち去り、家に帰ることにした。

家に帰ると、自分の部屋で雪羽の帰りを待つことにした。

雪羽が帰ってくれば音ですぐわかる。家が隣だからな。

しばらく待っているると雪羽が帰ってきたようだ。

それを確認してからすぐに家を出て、雪羽の家へと入っていった。部屋に入ると、制服姿の雪羽が立っていた。

「あつ……………」リョウくん。ど、どうしたの？ そんな急に……………」

雪羽へと近づいていく。

「リョウくん？ 何かあった——むぐつ!?!」

密着するまで近づくと同時に——キスをした。

「ん————ん————!?!」

逃げられないように抱き着き、頭を押さえつける。

キスをした後は舌を入れ、雪羽の口の中をまさぐった。

雪羽の舌を捕えると、絡めるように舐め続けた。

俺がそうしていると、雪羽は逃げるように舌を動かし始めた。

だが逃がさない。すぐに追い詰め、再び絡めるように舐め続ける。

しばらくは抵抗していたが、徐々に身をゆだねるようになってき

た。

息苦しくなってきたのも忘れ、ひたすら口の中を犯し続けた。
何度も何度も何度も何度も何度も何度も犯し続け――

終わって離れたのは5分ほど経ってからだった。

お互いの口周りは唾液でべつとりとしている。

「はあ……はあ……リョ、リョウくん……い、いきなりこんなことして……なんのよう……」

俺はなぜこんなことをしたんだろうか。

体が勝手に動いたとしか言いようがない。

衝動的に動いてしまった。

「今日さ。竹中に告られたんだろう？」

「……！ どうしてそれを……」

「もちろん断ったんだよな？」

既に結果は知っているが、本人の口からハッキリと聞きたかった。

「う、うん。ちゃんと断ったよ」

「それでいい。お前は誰とも付きあうな。これからも絶対に断れよ？」

「あの……ど、どうしたの急に……」

「いいな？」

「わ、分かったよう……」

そうだ。

雪羽は俺の理想になるように育てたんだ。

ずっと前からそうしてきたんだ。

俺が最初に手を付けたんだ。

誰にも渡すもんか。

雪羽は俺のいいなりなんだからな。

幼馴染はイジメられっ子

ある日のこと。

学校の放課後で帰り支度をしていると、雪羽に二人の女子が話しかけてくるのが見えた。

「おい。ちよつとついて来いよ」

「えっ？ な、なに？」

「いいから。来いっつってんでしょ！」

「あ……う、うん……」

相手の態度に気圧されたのか、雪羽はしぶしぶ席を立って女子の後を追っていった。

なんだろうなあれは。

嫌な予感がする。俺も付いて行ってみよう。

雪羽達の追っていると、校舎の裏側に辿り着いた。ここはひとけの無い場所だ。

「——んだって？ 聞こえねーよ！」

突然、そんな怒鳴り声が聞こえてきた。

「なあ。お前のせいだってこと分かってんのか？」

「そ、そんなこと知らないよう……」

「うるさいな！ アンタのせいで迷惑してるだよ！」
なんだなんだ。

さっきの女子二人が雪羽を責めてるのか？

「わ、私は何もしてないのに……」

「はあ？ お前が誘惑したんだろ？ じゃなけりやお前みたいなやつに告つたりしないだろ！」

「そうだそうだ！」

「え、ええ……」

何の話だろう。

雪羽が困惑しているのが目に浮かぶ。

「お前が竹中の気を引こうとしたんだろ？ そんでキープ君でも増や

そうとしたんじゃねーの?」

「うつわサイテー。とんだビッチじゃねーか」

「私はそんなことしてない……」

「はあ!? 嘘ついてんじゃねーぞ! じゃあなんで竹中の気を引こうとしたんだよ!?!」

「だから……それは向こうが勝手に……」

……ははーん。

何となく読めてきたぞ。

「とにかくだ! 竹中がアタシらを避けるようになったのはお前のせいだろうが!」

「マジでムカつくわー。こんなネクラ女に取られるなんてよお」

「うう……」

やっぱりな。

どうやら雪羽に告白した竹中のことで揉めてるらしいな。

あの女二人は、竹中に惚れてるらしい。けど振り向いてくれないのは、雪羽のせいだと思ってる。

だから八つ当たりをした……ってところか。

……アホらし。

惚れた男が取られたと勘違いしただけじゃねーか。

「おい! なんか言ってみろよ! クソビッチがよお!」

「チョーシに乗るなよテメエ!」

あーあ。

仮にも女なんだから、そんな汚い言葉使わなくてもいいのに。

どう考えてもあいつらに問題がある。だから竹中に相手されないんだろうが。

全く。仕方ない。

雪羽はずっと縮こまってるし。助けてやるか。

「おい。その辺にしとけよ」

「なっ……響!」

「……ッ!」

スマホを片手に持ったまま近づいていく。

「寄ってたかって弱い者イジメとか、くだらねーことしやがって」
「べ、別にアタシらはイジメてたわけじゃ……」

「そ、そうだよ！　ちよーつと聞きたいことがあったただだよ！　な、なあ？」

「そ、その通りだよ！　普通に会話してただけだつて！」

なに言つてんだこいつら。

そんな言い訳通じるわけないだろうに。

「ほお？　あくまでイジメじゃないと言いたいわけか？」

「あ、ああ」

「そ、そんなことするわけないじゃん！」

なんでバレないと思つてるんだろこいつらは。

「まあいいや。判断するのは学校側に任せるとするわ。さっきの場面、スマホで撮つてあるから」

「なっ……!?!」

「マジかよ……」

うちの学校は、イジメに対して厳しく取り締まるほうである。先生達も目を光らせているし、暴力行為が発覚すれば退学ものだ。

にも関わらず、イジメが無くならないってのはどういうことなんだろうな。

世の中から犯罪が無くならないのと同じ理屈だろうか。

「わ、悪かったよ！　少し興奮しすぎただけつての！」

「ま、まさかセンコーにチクったりしないよな……?」

「さあな。それはお前たち次第だ。二度とこんな真似しないと約束するなら、今回のことは忘れてやる」

「……チツ。もう関わらねーよ。これでいいか？」

「ああ」

「もう行こうぜ。やってらんねーよ」

「くそっ……」

そして二人は逃げるようにして立ち去って行った。
ふう。

ひとまずこれで一安心かな。

「あ、あの……リョウくん……」

「全く。何してんだお前は。あのくらい自分でケチらせよ」

「で、でも……」

「そんな態度だから舐められるんだよ。もっと強気にしていればいいんだよ。そうすりゃあんなアホみたいな連中に狙われることもないだろ」

「う、うん……」

雪羽は昔からこうだ。小学生の頃から変わってない。

常に弱気で大人しくしているもんだから、ちよくちよくイジメられることもあった。

その度に俺が助けてやってるんだよな。

「リョウくん……」

「何だよ」

「あのね……あ、ありがとう」

「……このくらい大したことじゃないっての」

「で、でもね……私、すごく嬉しかったよ。絶対助けに来てくれるって、信じてたもん」

「あのなあ……いい加減、俺に頼らずに何とかしろってんだ」

「えへへ……」

「こいつは本当に学ばないな。」

俺が居なかつたらどうするつもりなんだろうか。

「まあいい。さっさと帰るぞ」

「うん。あのね。今日はハンバーグにしようと思うの。よかつたらリョウくんも食べに来ない？」

「お。いいね。腹減らしてからいくわ」

「楽しみにしててね！ ガンバって美味しく作るから！」

そんな会話をしつつ、一緒に帰宅することにした。

幼馴染と卒業

今日はいよいよ卒業式だ。

卒業式には雪羽の母親も来ていた。仕事で忙しいのにも関わらず、無理してスケジュールを調整して来てくれたらしい。

だが卒業式が終わると、すぐに立ち去ってしまった。そのまま仕事場に向かうらしい。

仕事場に向かう前に、何度も俺と雪羽に謝っていた。相変わらず律儀な人だ。

そんなこんなで卒業式も終わり、二人で家に帰宅することとなった。

家に帰ると、自分の部屋に入った。

荷物を投げ捨て、ベッドに座る。

「長かったな……」

思わず呟いてしまう。

これは今日の出来事についてじゃない。

俺は今日という日をずっとずっと待っていたのだ。

長かった。本当に長った。

小学校の頃に雪羽に出会ってから、色々あった。

その時からだ。俺はある決意をしたのだ。

「さてと……」

立ち上がって引き出しへと向かう。

引き出しの中を漁り、ある物を取り出す。

いよいよこれを使う日が来たと思うと、興奮を抑えられなくなる。

それをポケットにしまい、雪羽の家へと急いだ。

雪羽の部屋に入ると、まだ荷物整理していた雪羽がそこにいた。

「あっ……リョウくん。どうしたの?」

「……………」

こいつは本当に俺の理想通りに育ってくれた。

顔つき、スタイル、胸の大きさ、性格。全てが俺好み特徴だ。世界広しといえど、雪羽のような女は少数しかいないだろう。だからこそ——この日をずっと待っていたのだ。

「リョウくん……？」

ゆっくりと雪羽に近づく。

「あの……さつきから何でダンマリなの……？」

雪羽にそばに行くと、体を掴み——

「……へ？」

そのままベッドに押し倒した。

「リ、リョウくん？ な、なにをするの……？」

「……ずっと待ってた」

「えっ？ な、何の話……？」

「この日がくるのを……ずっと待ってたんだ」

「あ、あの……？」

ポケットから家から持ってきたある物を取り出し、目の前に見せつけた。

「これ。何だか分かるか……？」

「え？」

雪羽は俺の手に持っている物をジッと見つめた。

最初は困惑した感じで見つめていたが、徐々に驚きの表情へと変わっていく。

「そ、それって……まさか……」

「さすがに知ってるか。さつき持ってきたんだよ」

「……ッ！」

俺が持っている物。

それは——コンドームだ。

「な、何で……リョウくんがそんなものを……」

「決まってるだろ。今から使うからだよ」

「……」

そう。

これから雪羽と性行為をするために用意した物だ。

雪羽はずっと処女のままだ。

意外かもしれないが、これには訳がある。

今までもキスをしたり、胸を揉んだりはしたものの、一線だけは超えることは無かった。

雪羽が俺の理想の女に育ちきつてから、食べてしまおうと決めたのだ。

だから高校を卒業するまで待つことにした。

要するに、俺は楽しみを取っておくタイプなのだ。

「もういいよな？ 今日という日をずっと待っていたんだ。まさか俺が襲ってこないか思ってたわけじゃないよな？」

「……………あは」

「分かったらさっさと服を脱げ。もう我慢の限界なんだよ」

「あははは……………」

俺の息子も、はち切れんばかりに大きくなっている。

一ヶ月前から禁欲してたからな。準備は万全だ。

さっそく服を脱ごうとした時だった。

「んなっ!？」

突然、雪羽が俺を掴み、転がるように動いた。

するとさっきまで俺が雪羽に馬乗りしていたのに、今は俺が下になり、雪羽が俺に馬乗りになる格好になってしまった。

「お、おい！ 何したんだ!？」

「ふふふ……………そうだったんだあ……………」

な、何が起きた？

どうして俺が押し倒されているんだ？

「雪羽？ どうしたんだ急に?」

「もう……………そうならそうと言ってくれればよかったのに……………」

雪羽の様子がおかしい。

何が起きている？

「私はね、ずっと待ってたんだよ？ ずっとず——つと待ってたんだよ？ リョウくんならいつか私の処女を奪ってくれるんだって。私はいつでもリョウくんに全てを捧げる覚悟があったんだよ？ で

もね、いつまで経ってもそんな素振りは無かった。もしかしたら私に飽きたんじゃないかって思ったこともあったの。知ってる？ 前に裸見られたことあったよね？ あれってワザとだったんだよ？ こうすれば襲ってくれるんじゃないかって思ってやってみたの。でもね、結局何もしてこなかった。もう私には興味ないのかと思ってショックだったんだよ？ それから何度か誘惑してみようとしたけど、結局どれも駄目だった。何やってもリョウくんは襲ってくれなかった。それ以外にもあれこれ試してみただけど、振り向いてくれなかったよね。そんな日々が続いてどんどん自信が無くなっていたんだよ？ 卒業したら私のことなんて見捨てられるんじゃないかって。ずっと不安だったんだよ？ でもね、今日やっと分かったよ。卒業するまで待つててくれたんだね。もう、リョウくんだったら。それならそうと言ってくれればよかったのに。だったら私も色々準備したのに。あ、でもね。避妊具なら私も持つてるよ。いつかこうなる日がくるかもしれないと思って持つておいたの。別に使わなくても私は構わないよ？ リョウくんの好きなようにしていいからね？ もし子供が出来ちやつても大丈夫だよ！ えへへ……」

早口で喋っているが、唐突すぎて言ってることの半分も理解出来なかった。

雪羽に何が起きたんだ？

こんな性格じゃないはずだぞ。

俺の知らない雪羽が居る……

「ねえ。リョウくん」

「な、何だ？」

その時に見せた表情は、今まで見たことも無いような笑顔だった。

「大好きだよ」

幼馴染が好き

私には幼馴染が居る。

その人の名前は、響ひびき 亮介りょうすけ。

小学校からの付き合いで、いつもリョウくんと呼んでいる。

リョウくんはすぐ隣に家に住んでいるので、いつも私の家に遊びに来てくれる。

お父さんは小さい頃に離婚していて、今はお母さんと一緒に住んでいる。

けどお母さんは仕事で忙しく、家にいることはほとんどない。

だからいつも一人ぼっちだった。

それは小学校でも同じだった。

学校では喋ることもなく、いつも静かに本を読んでいるようなタイプだった。

内気で自分から話しかけるようなこともしなかった。こんな性格だからか、友達もほとんど出来なかった。

そういうタイプはイジメの対象のなりやすいのだろう。よくイジメの標的になっていた。

ある日のこと。

空き家だった隣の家に引っ越してくる人達が現れたのだ。

その人達こそがリョウくんの家族だった。

それから私と同じ学校に転入し、偶然にも同じクラスになった。

最初あまり話しかけることもなく、ただのお隣さんという関係だった。

けどある日、私がイジメられている時、リョウくんが助けに来てくれたのだ。

その時の出来事は今でも思い出す。あの時のリョウくんは本当に格好良かった。

リョウくんのが好きになったのはそれからだ。

お母さんは、家に私一人でいるのを気にしたのか、リョウくんに合いかぎを渡したみたいだった。

それから家にいるときでも、リョウくんが遊びにきてくれるようになった。

本当に嬉しかった。ずっと寂しかった私を救ってくれたような気がした。いくら感謝しても足りないくらいだ。

だからせめてと思い、料理を上達しようと考えた。

これなら遊びに来てくれた時にご馳走することもできるし、お弁当も作ってあげられる。

最初は上手く行かなかったけど、徐々に上達していった。リョウくんが『美味しい』と言ってくれる度に嬉しくなった。

中学に上がった頃。ある出来事が起きた。

いつものように、リョウくんが私の胸を大きくしようとして、揉んできた時のことだ。

私はされるがままになり、リョウくんに全てをまかせることにした。

抵抗せずにそうしていると、リョウくんがボソツツとあることを呟いた。

「……つまんね」

そういつて揉むことを止め、私から離れた。

「あ、あれ……リ、リョウくん？　ど、どうしたの？」

「帰るわ。気分じゃない」

「えっ？　えっ？」

リョウくんは興味無さそうに立ち上がって、そのまま部屋から出て行ってしまった。

「リョウくん………」

あまりにも突然すぎて、しばらくボーツツとしていた。

……何でだろう。

リョウくんは何で途中で止めちやっただろう。

どうしてあんなにも興味を失ったような表情をしていたんだろう

……

まさか……私に飽きた……？

思えば毎日のように会いに来てくれるし、その度に私の胸を揉んで

翌日。

リヨウくんは昨日の出来事が無かったかのように振る舞っていた。やはり昨日のあれは飽きたというだけとは思えなかった。それを確かめるために、あることを実行することにした。いつものように私の部屋に訪れ、胸を揉んでこようとしてきた。この時に、私はある行動を取った。

「や、やめてよう……」

「お？ 抵抗する気か？」

「だ、だって……恥ずかしいもん……」

「んだよ。くだらねーこと言いやがって。いつもやってることだろうが」

「うう……」

そう。

わずかながら抵抗してみせたのだ。

それからのリヨウくんはいつも通りだった。昨日のようにいきなり止めたりはしなかった。

これで確信した。

昨日、いきなり興味を無くしたのは、無抵抗だったからだ。

Sっ気なせいとか、相手がどう抵抗してくるのかを楽しむ性格らしい。

つまりリヨウくんの好きなタイプは『か弱いながらも抵抗してくる女の子』なのだ。

無抵抗の相手に対しては何もしてこない。本気で嫌がる時は強引に攻めてこない。そういうタイプだと思う。

これもリヨウくんの優しさなのだろう。

だったらこれからそうしよう。

リヨウくんに好かれるタイプになろう。

『か弱いながらも抵抗してくる女の子』を目指そう。

そう決意した。

それからはリヨウくんのいいなりになるようになった。

あれこれと私に対して、色々と指示してくるようになった。
たぶんリヨウくんは、私を自分の理想の女の子に染めたいと考えて
いるんだと思う。

リヨウくんの行動が理解できるようになると、すごく嬉しく感じ
る。

私はリヨウくんの理想の女の子になろう。

私の人生はリヨウくんに捧げよう。

私はリヨウくんの為に存在するんだから。

そう思った。

高校に入ってもこの関係は続いた。

幼馴染が大好き

ある日のこと。

私が制服のままで見ると、リョウくんが突然入ってきた。そのまま居座り、漫画を読み始めてしまった。

制服から着替えたかったけど、リョウくんの前だと少し恥ずかしくなかった。

あれこれ言い合っていると、リョウくんが居るのに着替えることになっちゃった。

結局、リョウくんの背後で着替えはじめることになった。

リョウくんの目の前で下着姿になるという緊張感。この時は謎の高揚感に包まれた。

少し変な気持ちになったのを覚えている。

もしかしたら突然振り向き、襲われるかもしれない。

リョウくんにだったらいつ襲われてもいい。だから少し期待してしまっただ。

そんな期待をしつつ、わざと遅く着替えるようにした。

またある日のこと。

リョウくんがゲームソフトを持ってきて、私の部屋でゲームを始めてしまった。

しばらく待っていると、リョウくんがコーラを持って来いと言ってきた。いつもこうやって私を使い走りにしてくる。

けど私は嫌ではなかった。むしろ嬉しかった。

リョウくんのいいなりになれば、私のことを構ってくれる。それだけですごく幸せな気分になれた。

飲み物を持っていくときはペットボトルのままではなく、あえてコップに注いで持つていくことにしている。

理由は簡単。おかわりをするときも、また私に命令してくれるからだ。

何度もおかわりすれば、それだけ私に命令することが増える。だから

らいつも面倒な方法を取ることにしている。

またまたある日のこと。

リヨウくんが私の髪を触り始めたのだ。

いつも時間をかけて手入れしている髪を、リヨウくんが褒めてくれた。もうそれだけで胸いっぱい幸せに包まれた。がんばった甲斐があつたんだ。

次にポニーテールにしろと言われてた。これはチャンスだと思い、買ってきたリボンを見せびらかすことにした。

けど人前で付けることを禁止されてしまった。

ちよつと残念だったけど、リヨウくんはこの姿を独占したかったのかもしれない。

そう思うと買って正解だったとを感じる。

またまたまたある日のこと。

学校で帰りの準備をしていると、突然、知らない女の人が二人やってきた。

付いて行ってひとけの無い場所までやってくると、いきなり罵倒してきたのだ。

話を聞いてみると、どうやら竹中くんが関係しているみたいだった。

そういえば前に、竹中くんが告白してきたっけ。でもリヨウくん以外の人には興味無かったから、断つたのを覚えている。

けど目の前の二人はそれが気に食わなかったらしい。

聞いていて呆れてしまった。心底呆れた。

たいした努力もしてないくせに、竹中くんを取られたと思っっている。

そんなに好きなら、好かれるように努力すればいいのに。

勝手に人のせいにされても困る。

私はリヨウくんに好かれるために色々な努力をしたよ？ 本当に何でもした。

料理も勉強したし、スタイルも維持するようにしたし、髪も伸ばして手入れもしたし、胸も大きくなるようにしたし、性格もリョウくん好みに合わせた。これら以外にも色々なことをやった。

私はリョウくんのために存在している。

私はリョウくんのためなら何だってする。

私はリョウくんに全てを捧げる覚悟がある。

それに対してこの二人はどうだろう？

気を引こうとして失敗し、そこで諦めてしまっている。しかもそれを人のせいに行っている。

あまりにも馬鹿馬鹿しくて、呆れてものも言えないというのは正にこのことだろう。

そんな心境だったからか、思わず呟いてしまう。

「何も努力してないくせに……」

「は？ 何だって？ 聞こえねーよー」

私があればこれ言っても通じ無さそうだし、適当に流してやり過ぎよう。

そう思っただけでしばらくそうしていると、リョウくんが助けにきてくれた。

いつ見てもリョウくんはカッコいい。力づくではなく、言葉で解決してしまった。

昔からこうやって助けに来てくれる。私にとっての王子様。

やっぱり私にはリョウくんしかいない。

リョウくん以外には考えられない。

ずっと一緒に居たい――

けど卒業式が迫ると同時に、焦りが出てくるようになった。

何故なら、私は未だに処女だからだ。

いつかはリョウくんが奪ってくれると思っていた。

だけど、いつまで経ってもそんな素振りは見せなかった。

その気があれば、こっちはいつでも受け入れる覚悟があった。

だけど結局、もうすぐ卒業を迎えるのにも関わらず処女のままだった。

これだけは何度考えても原因が判明しなかった。
向こうからその気にさせようとして裸姿を見せたり、体を密着させたりと、色々な手段を使った。

しかしどれも成果は出なかった。

もしかしたら本当に飽きられたのかもしれない。

それとも私は遊びとしか見られていなかったのだろうか。

……分からない。どれだけ悩んでも全く分からなかった。

卒業したら私のことなんて見捨てられるのだろうか。

……それだけは絶対に嫌だ。

今までリヨウくんが居てくれたからこそ頑張れたんだ。

リヨウくんのために色々頑張ってきたんだ。

もうリヨウくん無し的人生は考えられない。

もし……このままりヨウくんと何も進展が無かったら……

私は――

とうとう迎えた卒業式。

結局、あれから関係が変わることも無かった。

私には魅力が無いのだろうか。

やはりただの幼馴染としか見られてないのだろうか。

都合のいい存在としか思われてないのだろうか。

いつそのこと、私の方から押し倒してみようかと思った。けどその

考えはすぐに却下することにした。

何故なら嫌われなくなかったからだ。

嫌われるぐらいならこのままでいい。そう思った。

幸いなことにも、リヨウくんは私と同じ大学に行くことが決まった。

まだチャンスはあると言えはあるということだ。

けどどこまで手を出してこないのに、待てばチャンスがくるとは考え難かった。

時間が経てば経つほどリヨウくんが遠くなっていく。

そんな思いだった。

もう打つ手が無いのかな。

ずっと幼馴染のまままで終わっちゃうのかな。

そんなの嫌だよ……

部屋でそんなことを考えていると、リョウくんが訪れてきた。

「あつ……リョウくん。どうしたの？」

「……………」

もしかしたら別れ話をしにきたんだろうか。

そんな考えが頭をよぎり、胸が苦しくなる。

「あの……さつきから何でダンマリなの……？」

リョウくんは何も言っていない。

本当に別れ話をするつもりなんだろうか。

身が引き裂かれる思いで待っていると、徐々に近づいてきた。

目の前までやってきて体を押され、そのままベッドに押し倒される

私。

突然の出来事に困惑していると、リョウくんはある物を取り出してきた。

「これ。何だか分かるか……？」

「え？」

あれは見覚えがある。

見せてきてきたのは……コンドームと呼ばれる物だった。

これを出してきたってことは……つまり……

「な、何で……リョウくんがそんなものを……」

「決まってるだろ。今から使うからだよ」

「……………」

やっぱり……

嬉しい……

嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい！

やっとこの日が来たんだ！

ついにリョウくんの一つになれる日が来たんだ！

夢にまで見たこの日。もう天にも昇る気分だった。

感激のあまり、つい押し倒してしまった。

それから我を忘れて、言いたかったことを色々とさらけ出す。
長年の思いをぶつけるかのように喋り続けた。

「ねえ。リョウくん」

「な、何だ？」

この時の私は、人生の中で一番の笑顔だったかもしれない。

「大好きだよ」

これからもずっと一緒に居ようね。

リョウくん――